

2026年の春分は3月20日です。

春分の日は、太陽が真東からのぼり、真西に沈む日。昼夜の長さが同じになります。『春分の日』を中日として、前後3日間がお彼岸にあたります。初日を「彼岸の入り」、最終日を「彼岸の明け」と呼びます。



春分は、西方の仏の住む極楽浄土と現世が交わる日とされて、これがお彼岸の起源になったという説があります。

太陽が真西に沈む、春分の日は、先祖が住む極楽と現世が交流しやすいときとされ、仏教国の中でも日本固有の信仰と伝えられています。

「お彼岸」はご先祖さまを供養したり、お墓参りをする日としても知られています。仏教においてあの世とこの世がもっとも近づく時期とされています。

ご先祖様と過ごし感謝する期間の行事という点では共通していますが、お盆は夏、お彼岸は春秋という時期の違いに加え、お盆は帰ってくるご先祖様の霊を迎え入れる、お彼岸はこちらから近くまで行ってお招きするという違いもあります。

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があるように、寒さは和らぎ過ごしやすい季節になります。桜の開花情報が聞かれるのもこの頃からです。



春分の日とは、昭和23年の祝日法の制定当初から設けられている国民の祝日です。

「自然をたたえ、生物をいつくしむ」ことを目的とした日です。本格的な春の訪れを知らせる「春分の日」。出会いと別れのシーズンではありますが、あらたな出会いと大いなる飛躍への期待を込めて過ごしたいものですね。

『菜の花や 月は東に 日は西に』 与謝蕪村

夕暮れ時に、西の空に〈沈む夕日〉東の空に〈昇る月〉が見えていたことから、〈満月〉あるいは〈満月〉前後の月と思われま。夕日に手を合わせて後ろを振り返ると、そこには大きな満月が！広い野原か峠道での天体ショーに感動した句なのでしょう。



与謝蕪村は、江戸時代中期に活躍した俳人で、画家でもありました。松尾芭蕉や、小林一茶と並んで江戸時代の俳句の巨匠とされます。

2026年の啓蟄（けいちつ）は3月5日です。

啓蟄（けいちつ）とは、土中で冬ごもりをしていた生き物たちが目覚める頃のこと。

「啓蟄」の「啓」という漢字には、「開く」や「開放する」といった意味があります。

また、「蟄」は「虫が土のなかなどに隠れている様子」を指す漢字です。

これらをあわせることで、「土に隠れていた虫たちが出てくること」を表現しています。

つまり、「寒い時期に冬ごもりをしていた虫たちが、次第に暖かくなってきたことによって活動を開始するころ」のことです。

生き物たちは久しぶりに感じるさわやかな風と、麗らかな春の光の中で生き生きとしています。



春に鳴る雷を、「春雷（しゅんらい）」「春の雷（らい）」などと呼びます。

夏と違い、すぐに鳴りやむことが多く、鳴ってもすぐにおさまるたとえにも使われました。

特に、啓蟄の頃に鳴る春雷を、「虫出しの雷（かみなり）」、略して「虫出し」などといいます。この雷の音にびっくりして、虫たちが飛び出してくると考えたのでしょう。

春雷は、春を告げる号砲ととらえることもできるかもしれません。

故郷（ふるさと）やどちらを見ても山笑ふ

正岡子規

子規は四国の松山出身。この歌を詠んだ当時は東京にいて、結核と闘っていたようです。

「春だなあ。故郷の松山の山々は、どこも芽吹いて、賑わっているだろうな」といった心情を詠んだようです。

春の山を「山笑う」と形容することがあります。

冬の眠りから覚め、芽吹き始めた華やかな山の様子を表しています。

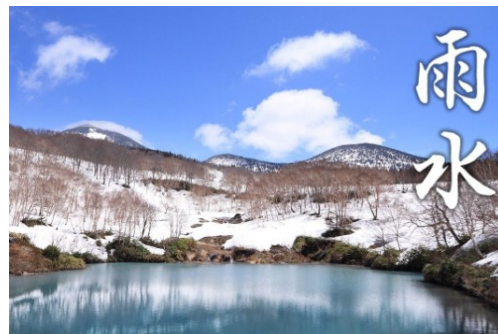


2026年の雨水は、2月19日です。

2月19日から二十四節気、第三節目である啓蟄の3月5日までの15日間ぐらいを指します。

雨水（うすい）とは、降る雪が雨へと変わり、雪解けが始まる頃のこと。

山に積もった雪もゆっくりと解け出し、田畑を潤します。雨水の季節は、昔から農耕の準備をはじめめる時期でした。畑や田んぼの上を覆っていた冷たい雪がとけ、田畑を潤していきます。



昔から、雨水は農耕を始める時期の目安とされてきました。

「陽気地上に発し雪氷とけて雨水となれば也」という言葉が江戸時代に発行された暦便覧（こよみびらん）にあります。

暖かい陽気になってきて雪や氷が解け、雨水になる、ということです。

この時に降る雨を「甘雨（かんう）」といいます。

やわらかく降りそぐこの雨は、穀物や草花の成長を助けてくれます。

また「春の雨は花の親」ともいわれるように、やさしく降りながら土にしっかりと育つための栄養を与えます。この時期に降る、春の恵みの雨には、様々な別名があります。

土を養う「養花雨（ようかう）」は、春に降る雨の異称で、草木の芽吹きや花の開花を促す、恵みの雨を指します。冬の乾燥した空気から一転し、潤いを与えて花を育てる雨という意味で、「育花雨（いくかう）」とも呼ばれます。

木の芽雨（このめあめ）は、2月下旬から3月初旬の、木々が芽吹く頃に降るしとしとした細かな春の雨。木の芽の成長を促す「恵みの雨」として知られ、別名「木の芽起こし」とも呼ばれる春の季語。寒さが残る時期に、生命の芽吹きを感じさせる情緒的な雨です。

草花の成長の時期に降る「慈雨（じう）」という名前もあります。

慈雨（じう）とは、日照り続きの際に降る、草木や作物を育む恵みの雨のことです。

特に「干天の慈雨（かんでんのじう）」という慣用句として使われ、非常に困っている時や待ち望んでいた時に差し伸べられる、救いの手や絶好の機会を例える言葉として用いられます。

面白し雪にやならん冬の雨（おもしろし ゆきにやならん ふゆのあめ）松尾芭蕉

「雨水（うすい）」の時季の寒さや景色を詠んだ代表的な作品です。

【解説】 冷たく降り続く冬の雨の中、「この雨は雪に変わるのだろうか」と、

冬から春へ移り変わる自然の微妙な変化を、期待を込めて眺めている様子を描いた句で、凍てつく冬の終わりと、少しずつ暖かさや雪解けを待つ「雨水」の季節の詩情を表現しています。

2026年の立春は2月4日です。

立春（りっしゅん）は、二十四節気において「春の始まり」とされる日であり、1年の始まりとも言われる節目です。

まだ冬の名残はあるものの、陽射しにやわらかさが感じられるようになり、春の訪れを告げる時期です。旧暦ではこの日が1年の始めとされていたため、決まり事や季節の節目はこの日が起点になっています。八十八夜、二百十日、二百二十日も立春から数えます。



冬至と春分の真ん中で、まだまだ寒いですが、暦の上では旧冬と新春の境い目にあたり、この日から春になります。

冬の季語に「三寒四温（さんかんしおん）」という言葉がありますが、それを体感するのは【立春】次節気の【雨水（うすい）】の時期になります。

その言葉の通り、

＜寒い日が三日ほど続くと、その後四日間くらいは暖かい日が続く＞という意味で、そうした日を繰り返して、徐々に暖かい日が続きながら、春へと向かっていきます。少しづつ陽が長くなるのに気が付き、地面に緑の伊吹を感じはじめる今日この頃。心も身体も少しづつ春の気候へ整えていきましょう。

立春の早朝、禅寺では、入口に「立春大吉」と書いた紙札を貼る習慣があります。

「立春大吉」の文字が左右対称で縁起が良く、

一年間災難にあわないといわれています。

和紙に墨で「立春大吉」と書いたお札を家の鬼門に

「厄除け」として貼っておくと、一年間災難に遭わないという

「おまじない」でもあります。

「立春大吉」という文字は、縦書きすると左右対称になります。

家に入ってきた鬼が裏側からお札を見ても同じく「立春大吉」と

読めます。そこで鬼が「まだ家の中に入っていないかった」

と勘違いして引き返すことから、「厄除け」になるからだそうです。



「寒中見舞い」は立春の前日まで。

以降は「余寒見舞い」（2月下旬頃まで）になります。

「雨の中に 立春大吉の 光あり」 高浜虚子

寒さの残る雨の立春に、玄関に貼られた「立春大吉」のお札が、春の光（希望）を放っているように見える様子を描いた作品。冷たい雨の中でも新しい季節の訪れと確かな希望を感じさせる、風情と生命力に満ちた句です。

2026年の大寒は1月20日（火）です。

1月20日（火）から2月3日（火）の節分までの約2週間が「大寒期」とされ、一年で最も寒いとされる期間です。

日本で一番寒かった日は、1902年（明治35年）1月25日、北海道旭川市で観測されたマイナス41.0℃です。この記録は100年以上経った今も、気象庁の公式記録として破られていません。

これは、富士山頂での記録（氷点下38.0度、昭和56年2月27日）よりも低い温度です。おりしもその日は、青森県の八甲田山で青森第5連隊が雪中行軍の訓練中に遭難し、多くの犠牲者を出したという出来事がありました。



大寒は二十四節気最後の節気にあたり、2月4日（水）は昔の暦で一年のはじまりである「立春（りっしゅん）」です。

二十四節気では、それぞれの季節のはじまりである「立春」「立夏」「立秋」「立冬」の前日を「季節を分ける日＝節分」と呼びます。なかでも旧暦において一年のはじまりとされていた立春の前日は、現代でいう大晦日のような位置づけで特に大切にされていました。



大寒の最終日の節分には、新しい一年の無病息災を願って、鬼を追い払う「豆まき」をしたり、鬼が嫌うイワシの頭を飾ったりします。また恵方巻をいただくのも、「これからはじまる一年を幸せで健康に過ごせますように」という意味が込められています。大寒の初日に鶏が産んだ卵は「大寒卵」と呼ばれる縁起物。冬のもっとも寒い時期、鶏たちも餌をたくさん食べて栄養をため込んでいることから、この日に生まれた卵は、栄養価が特に高いとされ、滋養強壮に良いとして重宝されています。

大寒の大々とした月よかな 一茶「七番日記」

一年で最も寒い日、最低気温が記録されるのも大寒の時期が多いようです。冬は空気が乾燥し、澄んでいるため星や月がいつもよりくっきりと見えます。

体が震えるような寒い夜道を歩きながら夜空に浮かぶ月をながめ、自分を優しく照らしてくれる月の明かりを体いっぱい浴びながら小林一茶はこの俳句を詠んだのでありましょう。

情景としては寒いのだが、「大々（だいたい）とした月」に、作者に共通する心の暖かさが現れています。



2025年の小寒は1月5日（月）です。

2026年1月5日は二十四節気で23番目となる“小寒（しょうかん）”の始まりで、この日から約15日間を指します。

寒さが本格的になり、冬の深まりを静かに感じる時期で、小寒の初日（1月5日）を“寒の入り（かんのいり）”、小寒から立春（2月4日）の前日までの約30日間を“寒中（かんちゅう）”“寒の内（かんのうち）”と呼びます。「寒の内」は一年中でもっとも寒さの厳しい季節です。



この時期には、「寒中見舞いを送る（新年の挨拶が遅れた場合）」「寒稽古をする」「寒仕込みをする」などの風習があります。

寒中は雑菌が繁殖しにくく、発酵がゆっくり進むため、味噌や醤油などの発酵食品を仕込むのに最適な時期とされています。

旧暦の1月15日は立春後の望月（もちづき。満月のこと）にあたり、その昔この日を正月としていたなごりで、元日を「大正月」、1月15日を「小正月」と呼ぶようになりました。

大正月が年神様を迎える行事なのに対し、小正月は豊作祈願や家庭的な行事が多いのが特徴です。

小正月に正月飾りや書き初めを燃やす「左義長」を行い、その煙に乗って年神様が天上に帰ってゆくとされ、正月行事に区切りをつけます。



左義長の由来は、「三毬杖（さぎちょう）」と呼ばれる平安時代の宮中行事からだと考えられています。正月に行われた打毬（だきゅう）と呼ばれる遊戯で使用する毬杖（ぎっちょう）と言う道具がありました。打毬（だきゅう）で破損した毬杖（ぎっちょう）を3本束にして、青竹を束ねたものに結び、その上に扇子や短冊などを吊るし陰陽師が謡いはやしながらかこれを焼いた行事でした。毬杖を3つ結んだことから三毬杖・三木張などと記され、やがて左義長と呼ばれるようになったと考えられています。

「左義長」は、「どんど焼き」「とんど」とも呼ばれ、その火で焼いたお餅などを食べると無病息災で過ごせるといわれています。

このように年神様を見送って正月行事も無事終了となるので、1月15日を「正月事じまい」といい、15日までを「松の内」とする地方もあります。

うす壁にづんづと寒が入りにけり

小林一茶

「薄い壁の隙間から、まるで何かが入ってくるような勢いで、寒さがじわじわと、そして深く（づんづと）入り込んできたなあ」という情景と心情を詠んだ句。

すき間だらけの小さな住まいの壁にまでしみ込む寒さを、づんづというユーモアをもって表現した一茶の心のありようが思われます。

2025年の「冬至」は12月22日(月)で、一年の中で最も昼の時間が短い日です。
また、12月22日から次の小寒の2026年1月5日までの15日間ぐらいを指します。

冬至とは生命の象徴である太陽の力が最も弱くなる日であることから、「死に最も近い日」と考えられ、恐れられてきました。
一方で、この日を境に日照時間が延びていくことから、陰の気が極まって陽の気に向かう折り返し地点とも位置づけられていました。



冬至は別名「一陽来復（いちようらいふく）」という言葉で表現されますが、
良くないことが続いたあとに好転すること。

冬至の日を境に運が上向いていくことを表しています。

冬至とは、夜の時間が最も長くなる日でありながら、季節をもたらす太陽への深い信仰を感じさせる重要な日として位置づけられていたようです。

年の初めに、新たな1年の幸せを願ってお参りするのが初詣です。

一方、年末に、1年間無事に過ごせたお礼を伝えるお参りは「年末詣（ねんまつもうで）」と呼ばれています。冬至から大みそかの間にお参りするのが「年末詣」とされています。

古い暦では、冬至を新しい年の始めとしていた考え方もあり、冬至に行事を行う神社などもあります。冬至には神社に出向いて、この1年を振り返るのも良い過ごし方です。

冬至から年末にかけての「年末詣」は、煤払い（12/13以降）が終わり境内が清められ、冬至で神仏の力が強まる時期に行う、感謝と新年の祈願を兼ねたお参りで、清められた場所で新年の準備を始める良いタイミングで縁起がよいとされます。

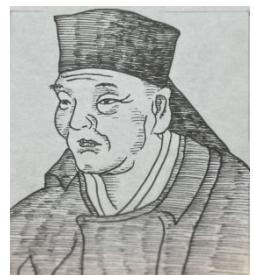
大掃除が一段落した年末（29日～31日頃）に参拝し、初詣とは別に、お礼参りや新年の願い事もできるのが特徴で、「除夜詣（じょやもうで）」とも呼ばれます。

元々は、大晦日の夜から元旦にかけて神社に籠る「年籠り（としごもり）」という風習が由来で、これが「年末詣」と「初詣」に分かれました。

混雑を避けてゆっくりお参りでき、「心の大掃除」のような意味合いもあり、神様のパワーが高まる時期とされるため縁起が良いとされています。

日本(ひのもと)の冬至も梅の咲きにけり

小林一茶



冬至という寒い時期にもかかわらず、日本で梅がもう咲き始めている、
という情景を詠んだ句で、季節の移ろいや生命の息吹を感じさせる作品です。

この句は、一茶の自然への愛着や、弱いものに寄り添う視点が感じられます。

一年のうちで昼が最も短い日。本来は真冬のど真ん中ですが、その頃に梅が咲いている、
という驚きと喜びが込められています。

厳しい冬の寒さの中で、一足早く春を告げる梅の姿に、一茶が生命の力強さや季節の不思議さを感じ取った、心温まる一句と言えます。

2025年の大雪は12月7日（日）です。

期間では、12月7日から冬至の前日である12月21日までです。

大雪（たいせつ）は、前の節気である「小雪（しょうせつ）」に変わって、雪が沢山降り始めるころのことを言います。山間部や北国では雪が積もり、寒さとともに本格的な冬がやってくる季節です。

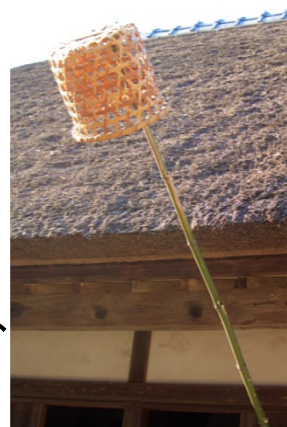
12月の8日に行われる行事で「事八日（ことようか）」があります。

「事八日」は、正月を挟んで対となる12月8日と2月8日の総称で、八日節句（ようかぜっく）や八日待（ようかまち）とも呼ばれます。地域によって「事始め（ことはじめ）」と「事納め（ことおさめ）」のどちらかの日とされています。



農耕の儀礼として「事始め（2月8日）」と「事納め（12月8日）」とする場合と、正月の儀礼として「事始め（12月8日）」と「事納め（2月8日）」とする場合があります。

この違いは、コトノカミが「年神様」か「田の神様」という違いです。この時に行う「事」が新年に迎える神様の事なのか、田畑を耕し農耕に勤しむ人の事かという違いで、日付けが逆転します。



家々箒目籠
(そうめかご)

【神様の事始めは12月8日、事納めは2月8日】

年を司る年神様を迎えるための神事を始めるのが12月8日の「事始め」で、すべてを終えるのが2月8日の「事納め」です。

こうして年神様に関する一連の神事を終えると、人々の日常が始まります。

【人の事始めは2月8日、事納めは12月8日】

田の神様を迎えて人の日常が始まるのが2月8日の「事始め」で、すべてを終えるのが12月8日の「事納め」です。

「事八日」は、一年の仕事の節目（事納め・事始め）とされ、この日に「針供養（はりくよう）」が行われます。「針供養」とは、折れたり、錆びたり、曲がったりして使えなくなった針を豆腐やこんにゃくなどに刺して供養する行事です。

「事八日」には、針供養の他にも風習がみられます。

無病息災を願って「お事汁」と呼ばれる具たくさんの汁物を食べたり、妖怪や一つ目小僧などの悪神が家を訪れるとされたため、魔除けとして目籠をくくりつけた竹竿やニンニクなどを庭先に置いたりします。身をつつしむために針仕事をしてはいけない、農作業をしてはならない、山に入ってはならないなどの言い伝えもあります。



いざ行でも雪見にころぶ所まで 松尾芭蕉

さあ雪見の宴に出かけましょう。雪に足を取られてすってんころりんと転ぶかもしれないけど。心浮き立つ雪の宴への期待感を楽しく詠いあげた句で、雪景色を見に出かけよう、そして雪で滑って転ぶまで楽しもう、というわくわくする気持ちを詠んだ句で、『笈の小文』（おいのこぶみ）に収められています。

2025年の「小雪（しょうせつ）」は11月22日（土）です。

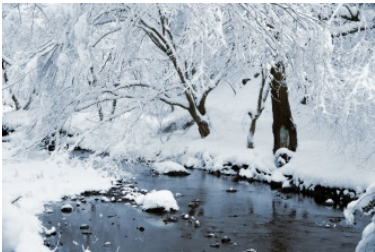
小雪は漢字通り「わずかな雪が降るころ」という意味。積もるほどではないことから、この名が付いたと言われていました。小雪は二十四節気の第20節目です。

「冷ゆるがこ故に雨も雪となりてくだるがゆへ也」

という言葉が江戸時代に発行された暦便覧（こよみびんらん）にあります。

日が短くなり、空気が冷え、雨降ってくる間に雪になっている、という意味です。

北国から雪の便りが届く頃ですが、まだ本格的な冬の訪れではありません。雪といってもさほど多くないことから、小雪といわれたものだそうです。陽射しが弱くなり紅葉が散り始めるころで、いちょうや柑橘類は黄色く色づいてきます。次第に冷え込みが厳しくなってきますので、冬の備えは整えておきましょう。



小雪（しょうせつ）の頃は雪が降り始めるくらい寒いのに、急に温かい日差しになることがあります。

このことを小春日和と言います。

小春日和が続くと春が来たような気分になってしまうのは、人間だけではありません。

植物も小春日和が続くと、春が来たかと勘違いして咲いてしまうことがあります。

この現象を帰花や忘れ花、あるいは狂い咲きと呼ぶことがあります。

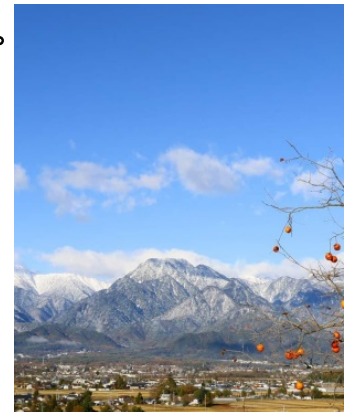
寒いかと思えば、まだ暖かい日もあり、小雪（しょうせつ）は体調を崩しやすい時期です。

自律神経も狂いやすく、内面の不調も出てくるかもしれません。

この時期には自分の体調を整えることを優先しましょう。

急に季節が進んだかと思えば、逆に戻ったように感じられる。

こんな時期には無理をしないことが大切です。



初霧や 茎の歯ぎれも 去年まで 小林一茶

有明山（別名：信濃富士）。
雄大な山を目の前にすると
深呼吸したくなりそうです。

小林一茶が晩秋から初冬にかけての静かな朝を詠んだ作品です。

「初霧」とは、冬の初めに立ちこめるやわらかな霧のこと。

「茎の歯ぎれ」とは、草をかんだときのしゃりとした感触のこと。それも「去年まで」と言うことで、今年もう枯れてしまい、あのみずみずしさが無いことを惜しんでいます。

11月の静かな朝に、霧の向こうに過ぎし日々を思い出させるような、やさしくも切ない一句です。

2025年の立冬は、11月7日（金）です。

立冬は例年11月7日頃で、冬の始まりの目安です。

暦の上で冬になると、俳句など言葉の世界でも冬の季語を使い始めます。

たとえば、「小春日和」。「小春」は旧暦10月の異称で、現在の11月から12月上旬頃にあたります。春という言葉がついているので、つい、春先の暖かい日に使ってしまいがちですが、晩秋から初冬にかけての、暖かく穏やかな晴天のことを表す言葉で、「小春」は春の季語ではなく、冬の季語になります。

立冬の頃には「こたつ」を準備する「亥の子の日」に暖房器具などを出す「こたつ開き」という行事があります。「亥の子の日」とは、亥の月（旧暦10月）の最初の亥の日のことで、2025年は「立冬」より少し早い、11月2日になります。

こたつを出して使い始める「こたつ開きの日」の慣習は、江戸時代に始まったといわれ、「亥の月の亥の日」に、こたつを出して使い始めたそうです。

なぜ、亥の月の亥の日に「こたつ開き」をしたのでしょうか？

それは、亥（イノシシ）が火を避ける動物と考えられ、

この日にこたつを使い始めると火事にならないという言い伝えがあったからだそうです。

こたつ開き
亥の月の亥の日。



その他にも冬支度として、石川県金沢市の兼六園などで行われる雪吊りもこの時期に行います。

雪の重みで枝が折れないようにするための作業で、兼六園では、11月1日に唐崎松から始まり、12月中旬頃までこの作業が行われ、冬の風物詩として知られています。



日本で古くから冬の保存食として伝わる「干し柿」は、この頃に作り始めます。

干し柿は、よく晴れた日に天日に干して作られます。

また、寒風にさらすことで乾燥が進み、甘みが増します。

水分が抜けて甘みが凝縮された干し柿は、自然な風味が楽しめます。



『待ち人の 足音遠き 落葉かな』 与謝野蕪村

意味：待ち人の足音が遠くに聞こえる落ち葉の道だなあ。

落ち葉は踏みしめると音がします。作者の待ち人は後ろから近づいてきているのでしょうか、音の大きさからまだ遠くにいるなあと風情を楽しんでいる句です。

2025年の「霜降（そうこう）」は、10月23日から11月7日までの時期を指します。

霜降（そうこう）とは、朝晩の冷え込みがさらに増し、北国や山里では霜が降り始めるころ。露が霜に変わり、だんだんと冬が近づいてきました。

秋が一段と深まり、冬に向けて気温がグッと下がる10月下旬ごろ～11月上旬ごろの時期を指します。秋が深まる霜降は、露（つゆ）が冷気によって冷やされて凍ることから、霜（しも）が降り始める時期であるという意味が込められています。

暦の上では秋の最後の節気で、寒さが厳しくなり露が凍って霜が降り始める時期です。

霜降期間のなかにある、文化の日を含む2週間は

「読書週間（10月27日～11月9日）」とされています。

中国の詩人・韓愈（かんゆ）が書いた【燈火可親】（とうかかしん）という詩があります。【灯火親しむべし】と訓読みされます。

「秋になって長雨がやみ、涼しい風が吹いている。灯りをともして読書をするのにぴったりな時期だ」という意味合いです。

この言葉が日本に伝わり、過ごしやすい秋の夜長に読書をする習慣を意味する言葉として広まりました。

読書週間告知のポスターにも「秋です。本です。読書です」や

「キラリ 知性 秋の1冊」などのコピーが登場して、いつしか

「読書の秋」が秋を代表するキャッチフレーズになったそうです。

活字離れといわれて久しいですが、一方で電子書籍が著しく成長するなど、本を読むことへの関心は衰えていません。書店や携帯端末で面白そうな「本」を購入するもよし、図書館に行くもよし。日を追うごとに夜の長さを実感できるこの時期、普段あまり本を読まない方も、秋の夜空を見ながらのんびりと読書を楽しむ時間を取ってみては如何ですか。



古来、春の桜と並び称されてきたのが、秋の紅葉（もみじ）です。

～奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞くとときぞ秋は悲しき～

「奥深い山でもみじを踏み分けながら鳴く鹿の声を聞くととき、秋はひときわ物悲しく感じられる」といった意味です。

三十六歌仙の一人、猿丸太夫（さるまるだゆう）による歌として

『古今和歌集』と『小倉百人一首』に収められています。

古今集では「詠み人知らず」として紹介されています。

本来、秋は米の収穫の時期で、実り豊かな楽しい季節で農村生活からはこうした発想は出てきません。

この歌は、貴族という都会生活者の感覚から生まれたものといえるでしょう。



2025年の寒露は10月8日です。

「寒い露」と書くように「冷たい露が降りる時期」という意味が込められています。この時期になると朝晩の冷え込みはきつくなりますが、日中に晴れた日は空気が澄んだ秋晴れの過ごしやすい日が多くなります。雨が繰り返すたびに、朝晩はぐっと冷え冬に近づいていきます。

五穀の収穫で農家は繁忙期となり、実りの秋の味覚が充実していきます。また、この時期は夜空が深く、月や星が美しい頃とされています。



1日の終わりに、ほっと一息。夜空を見上げてみませんか。

寒露の時期に行われる行事に神嘗祭（かんなめさい）があります。伊勢の神宮で、例年10月15日～17日に開催されます。

その年に収穫した新穀を天照大御神に捧げ、御恵みに感謝するお祭りです。

神嘗祭は、天照大御神が神々の住む天上の高天原（たかまがはら）で、初穂を食されたという神話に由来するといわれ、「日本書紀」によると、この国の稲作は天照大御神から授けられた稲穂により始まったと記されています。

歴代の天皇陛下は、この地にお米の恵みを伝えてくださった皇祖とされる天照大御神に感謝を捧げ、その年の初穂を奉納します。「神嘗祭」「新嘗祭」の一連の行事です。

11月23日に行われる新嘗祭（にいなめさい）は「しんじょうさい」ともいい、「新」は新穀（初穂）、「嘗」はお召し上がりいただくこと・御馳走を意味します。



神嘗祭と同じ五穀豊穡の収穫祭にあたりますが、新嘗祭では天皇陛下が初穂を神々にお供えし五穀豊穡に感謝を捧げ祈念します。

神嘗祭と新嘗祭の主な違いは、新嘗祭では天皇自ら新米を召し上がるというのが神嘗祭との大きな違いになります。

古くより日本にとって、大切にされてきた神嘗祭と新嘗祭。

新米の季節になりますが、食への感謝を込めて、おいしく召し上がりたいですね。

秋の山 静かに雲の 通りけり 夏目漱石

秋の山々を静かに流れていく雲の様子を詠んだものです。

紅葉した山の上を、静かに雲が通り過ぎていく美しい情景が目には浮かぶ俳句です。